狩猟・牧畜論再考――アンデスから見る

2007年4月21日

南米・アンデス山脈ではリャマ、アルパカというラクダ科家畜が飼養されているが、その祖先野生種 ビクーニャとグアナコも生息している。家畜種はペルーからボリビアにかけての中央アンデスに多く飼 養され、グアナコはペルー中部からフエゴ島まで、ビクーニャはペルー中部からチリ北部までの高地に 生息する。4種の系統問題、野生種の生態、家畜の放牧形態を報告し、どのようにドメスティケーショ ンが進んできたのかを論じた。司会は風戸真理(京都大学)。

まず、川本芳(京都大学)が4種の特性を説明し、遺伝子の系統問題を論じた。4種ともに染色体は74本で、繁殖能力のある雑種ができる。家畜化の仮説には、グアナコを祖先種とする単系説、グアナコがリャマ、ビクーニャがアルパカになったという多系説が併存する。野生種を特徴づける指標の開発などの課題が残っているものの、血液タンパク質遺伝子からみると、グアナコとリャマ、ビクーニャとアルパカの近縁性が高いことが明らかになり、現時点では多系説を支持できると論じた。

次に、大山がビクーニャの生態について報告した。ビクーニャは単雄の家族群、若オス群という群れを形成する。夜間に寝る場所は一定で、毎日、水場と寝床の往復を基本とする。行動圏は寝床を中心として半径三キロメートルと推定された。ビクーニャを家畜化するうえで、群れ行動をすること、強い帰巣本能は有利であるが、家族群のオスによるメスの囲い込み、家族群がつくる排他的空間パーソナル・スペースをどのようにつぶしたのかが問題になると論じた。

さいごに、稲村哲也(愛知県立大学)は、ペルー南部で1978年から行ってきた現地調査にもとづき、中央アンデスの牧畜の特徴を論じ、近年復活したインカの伝統的な追い込み猟チャクを報告した。中央アンデスの牧畜の特徴として、定住的な放牧を基礎とし、季節的な移牧は行わないこと、搾乳しないことがあげられた。また、チャクという追い込み猟は、殺さない野生動物の利用法であり、藤井純夫による西アジアの考古学的研究を参照し、追い込まれた母と子を中心とする多数の群れを囲い込み、その後の世代交代がドメスティケーションと大きく関係しているのではないかという仮説を提示した。

コメンテーターの池谷和信氏(国立民族学博物館)から、今後の調査の進展には先史考古学の視点が必要なのではないかといったコメントが寄せられた。家畜種と祖先野生種が併存しているのは世界中でもまれであり、アンデスの家畜化を検証していくことは世界中の家畜のドメスティケーションを考えるうえでも、重要な資料を提供すると思われる。

大山修一(首都大学東京 地理学教室)